

1.1 大学で求められる「学士力・人間力」とは

本講義の中心的な話題であり、大学で求められる、またみなさんに身に付けて欲しい力「学士力・人間力」とは以下のようになります。

自力で課題を発見し、適切な資料・方法を駆使して、
自分なりに考え答えを導き出せる力

これは、高校までの基本的な学習である、教科書や問題集に載っている問題に解答するといったこととは大きく異なります。高校までの学習では、与えられた問題をいかに効率よく解き、正解を導くかが重視されてきました。これに対して、大学での学習では、問題さえも与えられない場合があります。そのときは、自分で適切な問いを発見するところから始めなくてはなりません。解き方もいくつかの例が示されることはありますが、基本的に解法の手引きや解答・解説といったものは存在しません。それどころか、答えが一つに定まらない場合や、誰でも理解できるような答えが存在しない場合さえ無数にあります。例えば、次のような問いにあなたはどうか答えますか。（ちょっとだけ真面目に考えてみてください。）

[問い]

人間は何のために生きるのか

何をどのように答えて良いのか悩みますよね。しかしながら、実はこのような難解な問いに対しても答えを導き出すことは可能です。その方法は、まず条件を付け（読んだ書物によれば）、目的を示し（満足する人生を送るために）、客観的なデータを踏まえ（これまで多くの人がそうしてきたように）、論理的に（みなで協力しなるとなし得ないことだから）持論を展開するといったものです。これらの前提を論を述べる際の「分析の観点」と言います。例えばこの観点到立てば、「人間は何のために生きるのか」に次のように解することもできそうです。

[解答]

様々な書物によれば、満足する人生を送るためには、多くの人がそうしてきたように、自分だけのことを考えず、みなで幸せになれるように社会に貢献できる生き方を選ぶべきである。なぜならば、社会全体が幸福になるためにはみんなの意識改革と協力が必要で、みな幸福が一人一人の幸福であるのであれば、我々はこれを目指して生きていくべきだからである。

仮に、上記のように難解な問いに答えることができたとしても、それがみなに受け入れ



てもらえるかはまた別の問題です。読み手・聞き手が納得できる答えを示すためには、次の三つの点に注意する必要があります。

一つ目、重要なのは適切な調査・論証の手続きを踏まえていることです。後で詳細に述べますが、「私は思う」とか「そうでないはずがない」とかいった書き手の判断を示すだけでは、まったく論証に必要な手続きを踏んでいることにはなりません。

二つ目、最終的に辿り着いた答えが、妥当（確率が高く）で、かつ穏当（普通にあり得ること）なものであると、読み手・聞き手を説得しやすくなります。すなわち共感を呼びやすいということです。ただし妥当な答えは必須条件ですが、穏当な答えはかならずしもそうではありません。自分なりに熟考し、論理的に考え、辿り着いた答えが極端なものであったとしても、妥当なものであれば、答えとして採用する場合があります。穏当な答えであることはあくまで受け入れられやすいという程度のものです。（自然科学の分野においてはその傾向が極めて強いです。人文科学の分野では穏当な答えが求められることもあります。）

三つ目、そしてもっとも大切なことは、「論理的説明力」です。簡単に言うと、なぜそのような答えに辿り着いたかを、理屈を立てて明解に説明できることということになります。この説明力には、「論理的思考力」（1.3.1 節）と「論理的表現力」（5.2 節）が含まれます。前者は論理的な思考の流れを、後者はそれを適切に分かりやすく（ある意味形式的に）表現する力を指しています。この二つの力に関しては、後にまた取り上げて詳述します。

ちょっと長くなりますが、このような力は高校までにみなさんが学んできたことになぞらえて言うのであれば、「難解な数学の問題の正解を得ることそのものではなく、その解答を得るための解法について、適切な方法であるか、またその他の方法はないか、もっと簡単な方法はないかということに考えを巡らし、さらにそもそもこの問題を考えることに意味があるのかといったことを、公平に評価すること」ということになります。これが我々が大学で学んでいく中で、身に付け磨き続けていかなければならない「学士力・人間力」の基礎なのです。

1.2 課題について

1.2.1 問いを発見する力・その重要性

自力で「問い」を発見する力を「問題発見力」と言います。後でも述べるように大学ではこの問題発見力（と解決する力）を特に重視して教育を行っています。高校までの学習と異なり、大学では教員の言ったことやテキストに書いてあることを無批判に鵜呑みにしてはいけません。「こう書いてあるが、本当だろうか」と常に疑ってみる姿勢を要求されることとなります。ちょっとした引っかかりや不明瞭な点を見逃してはなりません。それが問題発見へ繋がる第一歩であるからです。この問題発見力は社会に出ても必要になる力です。よく耳にする「与えられた仕事をこなすだけの人間」はダメだという箴言と強く関連付けられます。その意味で問題発見力は一生を通じて重要なスキルと位置づけるこ

とができます。

問題発見力はある種の洞察力・直感力に支えられているといえます。この力が未熟な者がいくら考えても有効な問いを得ることは困難です。(思い出してみてください。高校の国語や社会の授業で先生が何か質問はありませんかと問われたとき、先生をうならせる質問ができたことがあったでしょうか。)

ですが、自分には無理だと諦めてしまうのは些か早計に過ぎるといえます。なぜならこのような力は、みなさんが生まれ持った能力ではなく、これまでの経験や学修によって磨き上げられていく力からです。もしあなたが問題発見力に自信がないと思っているのであれば、これからの大学生活でたくさんの経験を積むとともに、知識を学んでいけばいいだけのことです。もちろん大学生活を終えて社会に出ても継続的に学修し、経験を積んで自分の問題発見力を磨き続けていかなければならないことも忘れてはなりません。

1.2.2 魅力的な課題とは

魅力的な課題とは、判断の基準として次の三つの点を上げておきます。

一つ目、「はっきりとは分からないこと」が課題になり得るということです。まずは自分がよく知らないことで見当を付け、辞書を調べてみたり、インターネット等で検索してみたりするのも良いでしょう。また図書館の情報検索等を利用するのも有効です。ここで言うはっきりとは分からないこととは、おそらく当たり前すぎて疑問にも思わなかったり、有効なデータが簡単に見つけられなかったりすることが多いはずです。

例えば、昼の挨拶はなぜ「こんにちわ」ではなく「こんにちは」と書くのが正しいかとか、「女性の方がたくさんの言葉を知っている」という直感は本当に正しいかとか、一見些細でつまらない疑問であっても、本当に知りたいと思うのであれば十分に魅力的な課題となり得る可能性があります。実は課題探しそのものも意味のある学習です。課題探しを通じて、実は世の中のことは、あらゆることが正確には明らかにされていないということにも気付いてほしいのです。

二つ目、「面白いと思うこと」も課題になり得ます。実はこれがもっとも重要なことで、面白いと思えない課題の調査・研究は長続きしないし、中身を深めることはできません。面白いと思うことは、言い換えれば、その課題の解決に、資料を調べたり、アンケート調査をしたりと一定の労力を払えることでもあります。何が面白いことなのかは実に多様です。一見個人によっても大きく異なっているように思われます。しかしながら、友人とよく話し合ってみると意外に何を面白いと思うかには一定の共通性があることに気付くはずで、それがどのような共通点を持つのかを話し合ってみることも自体も魅力的な課題と言えます。

三つ目、魅力的な課題は「知的好奇心を喚起すること」でなければならなりません。知的好奇心とは何でしょうか。まず、それが公共的で普遍的な問いであることです。例えば「日本人はどのくらいリンゴが好きか」という課題は立てられますが、「友だちの山田さんはどのくらいリンゴが好きか」という課題はほぼ価値がありません。多くの読み手・聞

き手はあなたの友人の山田さんの嗜好には興味がないからです。すなわち得られた答えがある程度の一般性（対象が日本人や中学生といった大きなものであること）を持つこと、予測性（その結果から何かの予測を得られること）を持つことが課題にとって、とても重要なのです。またその解決に主観的ではなく、客観的で論理的な説明が必要となる問いである必要もあります。ちょっと自分だけで考えてみてすぐ答えが分かってしまうような問いは、公共的で普遍的な問いとは言えません。

このような点をすべて満たした問いをここでは探求すべき魅力的な「課題」と定義しておきます。魅力的な課題と向き合う時間を過ごすことは、気の合う仲間とファミレス等で長い時間おしゃべりをして盛り上がる楽しさとは根本的に異なるはずで、時間をかけて真摯に課題と向き合い、それを丁寧に解き明かしていくべきものであることを忘れてはいけません。

1.3 学士力・人間力基礎で養うべき力

1.3.1 論理的思考力（ロジカル・シンキング：logical thinking）

1.1 節で取り上げたような論理的思考を展開するためには、次の二つの点が重要となるので挙げておきます。

一つ目、1.1 節でも指摘した「分析の観点」について説明します。持論を展開する場合には、かならず前提となる観点を定めておく必要があります。再度整理しておく、条件、目的、客観的なデータ、論理性を揃えて論を展開していくことが必要です。ここで言う論理性とは、「誰が考えてもだいたいそうなる」ということです。それを一般化したスキルが論理的思考力ということになります。

二つ目、「客観的なデータに基づく根拠」について説明します。それは論を展開するとき書き手が読み手・聞き手を迷いなく持論へ引き込んでいくための道しるべのようなものであると言えます。道を歩いていて、分岐点に来たときに右か左のどちらに進めばよいのかを判断するための材料のようなもので、この論にとって「どうやらこちらが本当らしいぞ」と思えるような資料でなくてはなりません。例えば、大きな話で言えば、「今世紀に入って地球の温暖化が進んだ」というのであれば、いくつかの観測点で前世紀と今世紀の気温差を示す資料がこれに当たり、小さな話で言えば、「3年前に比べてある店の料理がまずくなった」というのであれば、ある程度の人数的にインタビューしたデータ等を示すことが必要になるでしょう。気を付けて欲しいのが、仮に「ある店の来客数が3年前に比べて減少した」という客観的データがあったとしても、それは、根拠としては不十分です。なぜなら客の減少が「まずくなった」ことが原因かどうかははっきりと関連付けて良いものかどうか証拠不十分で判断に迷うからです。

1.3.2 批判的思考力（クリティカル・シンキング：critical thinking）

もう一つ、批判的思考力は学士力を考えるときに、非常に重要な意味を持っています。

まず、「批判」という言葉に惑わされないようにしましょう。ここで言う批判とは、否定や非難の意味ではなく、客観的に情報を分析、判断するという意味になります。言い換えれば、「ある命題（議論すべき内容）が正しいかどうかまず疑え」ということであり、それが正しいと考えられる理由を検討すべきであるということになります。もちろん検討した結果正しい（と考えられる）のであれば、それを受け入れることに問題はありません。

具体例で考えてみましょう。「男性の方が女性よりもかなり多くアルコールを飲む」という考えがあるとします。経験的にみて、どうも確からしいように思います。批判的思考では、このような確からしいこともまず疑ってみることから始めるのです。取り敢えずネットで調べてみましょう。その結果、なんと豪州ではアルコールの消費量が「近年では男女差が縮小している」ことが分かりました。以下、記事を一部引用します。

今回の研究によると、20世紀初頭に生まれた人々の間では、男性がアルコールを少しでも飲む確率は女性の2.2倍で、消費量が問題になる確率は3倍だった。また肝硬変等健康問題を引き起こす確率は3.6倍だった。しかし、時代が下がるにつれ男女差は縮小し、20世紀末に生まれた男性がアルコールを少しでも飲む確率は女性のわずか1.1倍で、消費量が問題になる確率は1.2倍、健康問題を引き起こす確率は1.3倍だった。

（「女性のアルコール消費 男性とほぼ同じに＝豪調査（NEWS JAPAN）」

<http://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-37759116> 18-03-12 参照。）

このように調べてみると意外な結果が得られることがあります。みなさんに求められている批判的思考力とは、まず「疑ってみること」から始まるのです。もちろん、上に示したネット上の記事が真実かどうかを十分に検討する必要があります（メディアリテラシー）。



富山大学が皆さんに期待する 「学士力」・「人間力」

副学長（学生支援担当）
清水 正 明

学士力とは何か？

「…幅広い知識や深い専門的学識を持ち、問題提起し解決する能力、組織や社会の一員として貢献する能力、他者と意思を疎通するコミュニケーション能力、新しいものやことを創造する能力、地域を志向する意識を身につけ、各学部が示す学修成果をあげた者に学士の学位を授与する。…」この文章は、富山大学のディプロマ・ポリシーからの抜粋です（本学ウェブページ参照）。

この中で、以下の5つの能力がとくに重要です。

(1) 幅広い知識

自然・社会・文化・人間について幅広く普遍的な知識を持ち続け、自立した市民として社会生活に活かす能力を身に付けている。

(2) 専門的学識

それぞれの専門性に応じた深い知識を持ち、活用する能力を身に付けている。

(3) 問題発見・解決力

自ら問題を発見し、情報や知識を複眼的、理論的に分析して問題を解決するとともに、新たに様々なものやことなどを創り出す能力を身に付けている。

(4) 社会貢献力

組織や社会の一員として自らの役割認識し、責任を持って自己を管理するとともに、倫理観と使命感を持って自ら行動し、地域と国際社会に貢献する能力を身に付けている。

(5) コミュニケーション能力

他者の考えを理解し、自らも情報発信する能力を身に付けている。また、適切な手段や言語を使い、多様な人々との意思疎通と協働を可能にする能力を身に付けている。

参考までに、文部科学省 / 中央教育審議会答申（平成 20 年 12 月）から、学士力に関する主な内容をまとめますと、以下の4つがあげられています。

(1) 知識・理解（文化、社会、自然など）

(2) 汎用的技術（コミュニケーション・スキル、数量的スキル、問題解決力など）

(3) 態度・志向性（自己管理能力、チームワーク、倫理観、社会的責任など）

(4) 総合的な学習経験と創造的思考力

人間力とは何か？

内閣府「人間力戦略研究会報告書」（平成 15 年 4 月）によれば、人間力とは、「社会を

構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」と定義されています。また、人間力は以下の3つの要素から構成されています。

(1) 知的能力的要素

「基礎学力（主に学校教育を通じて修得される基礎的な知的能力）」、「専門的な知識・ノウハウ」を持ち、自らそれを継続的に高めていく力。また、それらの上に応用力として構築される「論理的思考力」、「創造力」など。

(2) 社会・対人関係力的要素

「コミュニケーション・スキル」、「リーダーシップ」、「公共心」、「規範意識」、「他者を尊重し、切磋琢磨しながらお互いを高め合う力」など。

(3) 自己制御的要素

上記の要素を十分に発揮するための「意欲」、「忍耐力」、「自分らしい生き方や成功を追求する力」など。

教養教育総合科目「学士力・人間力基礎」の紹介

みなさんには、入学後の早い段階で在学中の学修や学生生活に関する基礎や展望を学び、高い使命感と創造力のある人材となっていただきたい。そのために、「学士力・人間力基礎」では、みなさん自身が学修上や学生生活上の計画を立て、正課内外及び学内外において主体的な学びや取り組みを実践できるように、多種多様な事象や知見などに対して、能動的に向き合い、理解し、責任を持って、自己を管理する重要性を学びます。図書館と連携して、アカデミックスキルの基礎も取り上げますので、どうぞご期待ください。

